

## 平成27年度日本医師会女性医師支援センター(共催：日本医学会連合) 「大学医学部・医学会女性医師支援担当者連絡会」

### —よりよい男女共同参画を目指して—

日 時：平成27年12月18日(金) 14時～16時

場 所：日本医師会館1階大講堂

報告者：大分県医師会男女共同参画委員会

委員長 谷口 邦子

委 員 縄田 智子

本会議は、平成25年度より開始され、今回3回目の開催であり、日本全国の医師会・大学の女性医師支援担当者と日本医学会の各分科学会より総勢244名の参加がありました。

大分県医師会からは、谷口邦子(大分県医師会男女共同参画委員会委員長)、縄田智子(大分大学)の2名が出席しました。

まず初めに、日本医師会の横倉義武会長と日本医学会・日本医学会連合会の高久史磨会長のご挨拶の中で、今年日本の女性医師が6万人(医師全体の20%)を越え、ヨーロッパ42～47%、アメリカ33%に比べるとまだ少ないものの、今後の女性医師急増に備えた支援への取り組みがますます重要であるとの見解が述べられました。

次に「1. 日本医師会の女性医師支援に関する取り組みについて」として、日本医師会常任理事・笠井英夫先生より、平成27年度女性医師支援センター12事業の説明がありました。事業内容は昨年とほぼ同様でしたが、それぞれ継続される中で「1. 女性医師バンクによる就業継続、復帰支援(再研修を含む)」「2. 医学生、研修医等をサポートするための会」の実績が大きく、「日本医師会女性医師バンク」は平成19年1月開設以来447件の就業実績に至っていることが紹介されました。

次に「2. 事例発表①大学の取り組み」として、旭川医科大学「二輪草センター」山本明美先生(旭川医科大学皮膚科学講座教授)と久留米大学「元気プロジェクト」守屋普久子先生(久留米大学医学部病理学講座助教)より、それぞれの大学での活動について紹介がありました。

旭川医科大学「二輪草センター」では、旭川市における医師不足と少子化の問題を同時に解決するための対策として、「働きやすく、子育てもしやすい施設」を目標に掲げ、大学全体を巻き込んだ子育て支援に取り込んでいる状況が紹介されました。“大学や病院は地域社会そのもの”という考えのもと、解剖学教授や耳鼻科・歯科口腔外科のドクター等による夏・冬の子供向け特別授業を企画し、授業を行うことで大学や病院に勤める同僚たちの子育てに参加してもらう、それが「イクメン」「イクボス」を育てることにもつながる、とのお話は大変興味深いものでした。

久留米大学「元気プロジェクト」では、プロジェクト主催講演会での横倉義武日本医師会長の「男女共同参画の取り組みは、女性たちの体験談を話す時代から、組織として取り組む時代、そして意識改革の時代へと発展している」との講演をもとに、学生のキャリア教育充実に最も

力を入れている、とのことでした。久留米大学は平成27年度入学者より、2年生から5年生まで毎年キャリア教育の時間を確保する方針とのことであり、大変画期的であると思いました。更に、各診療科での労働環境改善の取り組みを調査し診療部長会で毎月紹介して、診療部長(教授)への働きかけを継続的に行うことで管理者の意識改革を図る、という点にも感銘を受けました。

両大学とも支援体制を充実させるには意識改革が重要という点で共通していました。また同時に、医師全体としての長時間労働への対策や、若い女性医師の“鉄は熱いうちに打て”と“出産高齢化”をどう折り合いつけるか、が今後の課題であるとされました。

次に事例発表②学会の取り組みとして(1)日本循環器学会男女共同参画委員会委員長瀧原圭子先生(大阪大学総長特命補佐/大阪大学保健センター長・教授)と(2)日本リハビリテーション医学会理事長水間正澄先生(昭和大学医学部リハビリテーション医学講座教授)の発表がありました。

日本循環器学会では、診療科別男女別医師割合では内科が16.3%であるが、循環器学会に属する女性医師は12.5%と低いようです。年代別では20代、30代が多く、支部別では関東、四国が高く、北陸、東北が低い傾向があります。2005年から循環器学会学術集会プログラム委員会に女性委員が加わることになり、プログラム区分に女性セッションが新たに追加されました。2010年に日本循環器学会男女共同参画委員会が設立されました。

学術集会では、委員会セッションを開催し、地方会でもセミナー・フォーラムを開催しています。辞めない女医を作るためには1)柔軟な勤務体制、2)院内保育(学内保育)病児保育・病後児保育(今後は介護も加わる?)3)理解ある上司・家族が必要であり、続けられる環境整備が必要です。さらに勤務改善し仕事の継続支援、キャリアアップの支援(専門医制度など)が求められます。

日本リハビリテーション学会では、医師会員に占める割合は14.2%、専門医における割合は20.1%、代議員に占める女性医師の割合は10.2%です。リハビリテーション科女性専門医ネットワーク(Rehabilitation Joy Network for Women Psychiatrists R J N)が2009年には専門医会の一組織として、2013年からはR J N委員会として発足し、企画運営を行っています。主な活動内容は医学生・研修医をサポートするための会(年1回)、リハ教授への若手医師によるインタビュー(年3回)、R J N懇親会(年2回程度)等の活動を行っています。50周年キャッチフレーズは「生きる時を、生かす力。リハビリテーション医学。」です。

フロアからの質問に対しては、北海道では地域的なこともあって、夫婦で赴任できるように行政が対応しているとか、産休や育休を取らない「頑張っている人」への支援が必要ではないか、久留米ではパートが援助してペアで働く体制、親子関係を理解して授業参観をサポートする、専門医制への対応、大学で働く場合の手当て等が議論されました。

今回初めてこの会に参加しましたが、前半にも述べているように前回から学会も参加して「体験談を話す時代から、組織として取り組む時代、そして意識を改革する時代」へ前進している姿勢が見られ、大いに勇気づけられました。

大分県においても参考にする点が多々あったと思うので、参考にしたいと思います。

